

「道徳」という根が弱れば、「経済」という花は咲かない

道徳心の喪失が経済低迷の一因



中桐

令和6年能登半島地震で犠牲となられた方々のご冥福を祈りながら、被災された方々にも心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復旧・復興を祈念いたします。

さて今回は、中桐万里子さんとのお話です。10年振りに二度目となります。

中桐 よろしくお願いたします。

日本の2023年の名目GDP(米ドル建て)がドイツに抜かれ、世界第4位に転落しました。1968年に日本のGDPが当時の西ドイツを上回り、以降、世界第2位の経済大国としての地位を長らく保ってきました。

しかし、まだ記憶に新しいところですが、2010年に中国に抜かれ第3位に後退し、そして2023年には4位に。日本の円安、ドイツの物価上昇が背景にあるようですが、根本的には長年にわたる日本経済の低迷が原因でしょう。

中桐 皆さんのように憂える方はたくさんいらっしゃると思

います。イギリスの歴史学者であるアノルド・トインビーは、「二つの国が争っているのは、戦争によってもない。天変地異でもなければ、経済破綻によってもない。国民の道徳心が失われた時にその国は滅びる」と指摘しています。これは、今の日本に十分当てはまるのではないかと私は危惧しています。

中桐 二宮尊徳は、「道徳なき経済は犯罪である」と言っています。道徳にふれている点でトインビーと尊徳の言葉は重なっており、しかも、尊徳は人づくりのプロだと私は感じています。

中桐 企業の経営資源は人物、金、情報とよく言われていますが、これらを使うのは結局が、この人であり、正しい人間力の追求が不可欠です。

中桐 二宮尊徳の功績や人となりの中から、道徳をキーワードに人づくりの参考になる

お話を聞かせ願えばと思ひます。

中桐 かしこまりました。「尊徳」は50代後半になってから使っていた名乗りで、それ以前は「金次郎」と自ら記していましたので、私からは「金次郎」と呼ばせていただきます。まず金次郎の生い立ちについて説明させていただきます。

中桐 お願いします。

中桐 金次郎は1787(天明7)年に相模国栢山村、現在の神奈川県小田原市の農家に生まれました。史料によれば江戸時代を生きた人物なのに、身長が182センチ、体重が94キロあり、現代でも大柄といえる偉丈夫だったようです。70歳という当時としては長生の人生を送り、その大半を農業に捧げ、徹底した実践主義行動主義を貫きました。

中桐 当時の農業は大変です。天明の大飢饉(1782)、1788年、天保の大飢饉(1833、1837)に代表される冷害と大凶作が続いたからです。どんなに努力したって、うまくい

中桐 金次郎は10代半ばで両親を相次いで亡くし、それから伯父の家に身を寄せました。二宮家はもともと裕福だったこともあり、金次郎の父・利右衛門は学問を一生懸命に学んだ人物でした。その学びの影響もあり、お金に困って相談に来た人に次々とお金を貸すなどの救済を実践し、「栢山の善人」とも呼ばれていました。でも、貸したお金は返ってこず、持っていた田畑は度重なる川の氾濫で荒れ果て、隣りに家は貧しさのどん底に陥ります。金次郎は両親の死後、16歳の時には無一文になり、やむなく、父の形見である本を持って伯父・萬兵衛の家にやっかいになる

中桐 わけです。銅像の多くは、その頃の姿だと思われま

中桐 なるほど。

中桐 萬兵衛は、弟の利右衛門とは違って、農家がむやみに学問にのめり込むのは危険だという考えの人でした。金次郎が夜、明かりを灯して勉強していると、伯父さんから油がもったいないと厳しく叱られたエピソードが有名です。そこで金次郎は菜の花の種をまき、収穫した菜種を夜の照明に使用しました。

中桐 菜種のほかに、捨て苗から一俵分の米を栽培したとも言われています。

中桐 萬兵衛は意地悪おじさんのように描かれることが多いのですが、菜種や稲を育てる土地を留意することが多いのは、金次郎をバックアップは陰で金次郎をバックアップして、再び売りに出しました。倍々が、売れれば経済的な利益は心と田畑の復興、つまり「道徳」という実利づくりと「経済」という実利づくりにおける二本柱にしました。

中桐 江戸時代にそういったこと

中桐 目をよく見ていたと言われている。

中桐 こんな逸話があります。ある農家が毎日一生懸命働いているのに、どうしても貧乏から抜け出せないと言った。金次郎はそれを聞いて、後日一言だけ言い残して帰りました。「掃除しろ」と。

中桐 一目見て、その農家の心の有り様が見えただけですね。

中桐 納屋には鍬や鎌、鋤などの道具が足の踏み場もない感じでぐちゃぐちゃに置かれていた。手入れもされていませんでした。目的の道具が見つからないと、次々と買い足しているのを見て、金次郎は「掃除しろ」と。

中桐 それでは生産性が悪いですね。

中桐 道具を探す時間の無駄。見つからず買い足すお金の無駄。道具を手入れしない効率の無駄。納屋の様子から多くの「無駄」を発見します。

中桐 生きて働くことができる時間の尊さ、汗水流して手にしたお金の大切さ、鍬や鎌を製造してくれている仲間のかげがえのなさ。そうした一つひとつの小さなことを馬鹿にしていた結果、貧乏にあえいでいたわけですね。金次郎の助言に従い、農家が納屋を掃除すると、収量がV字回復しました。

中桐 尊徳は経営コンサルタントという感じですね。

中桐 「忙」という字は「心を亡くす」と書きます。道具に対する敬意や仕事をやる環境への感謝をなくせば、ただ忙しいだけで収益は得られないのです。

中桐 私も経営指導の中で、仕事で利用する物や道具の大切

二宮金次郎(尊徳)七代目子孫「親子をつなぐ学びのスペース「リレイト」代表 中桐万里子氏



中桐

先ほどふれた「経済なき道徳は癡言である」という強い口調の表現は、少年期のそうした生い立ちが深く関係しているように感じます。

中桐 金次郎は以後、廃田の復旧や耕作に努め、20歳になって以降は、手放した田畑を次々に買い戻し、32歳で、村で2番目の大地主になりました。

中桐 金次郎は耕作に向きました。

中桐 金次郎は大地主になりました。

中桐 金次郎は耕作に向きました。

も次々取り組まれます。

中桐 農村再建は大変だったでしょうね。

中桐 洪水に遭うなどして荒廃した農村で最も荒れている、疲弊しているのは人の心です。頑張っても報われない、一生懸命作物を育てても年貢に持って行かれる。自然災害がひとたび起きれば、一粒の粟りも得られない。

中桐 もう理不尽ですよ。

中桐 明日への希望を失って、努力する意味が見出せない。だから「頑張りたい」「努力しよう」「未来は明るいはずだ」といった心を取り戻さないといけない。

中桐 でも同時に、人間は精神論では生きられないので、絶対に必要なのが「米びつ」、言い換えれば経済的な利益です。心の田畑は経済的な利益の田んぼと一緒に復活させないことには、農村再建はありえない。それ故、金次郎は心と田畑の復興、つまり「道徳」という実利づくりと「経済」という実利づくりにおける二本柱にしました。

中桐 江戸時代にそういったこと

中桐 目をよく見ていたと言われている。

中桐 こんな逸話があります。ある農家が毎日一生懸命働いているのに、どうしても貧乏から抜け出せないと言った。金次郎はそれを聞いて、後日一言だけ言い残して帰りました。「掃除しろ」と。

中桐 一目見て、その農家の心の有り様が見えただけですね。

中桐 納屋には鍬や鎌、鋤などの道具が足の踏み場もない感じでぐちゃぐちゃに置かれていた。手入れもされていませんでした。目的の道具が見つからないと、次々と買い足しているのを見て、金次郎は「掃除しろ」と。

中桐 それでは生産性が悪いですね。

中桐 道具を探す時間の無駄。見つからず買い足すお金の無駄。道具を手入れしない効率の無駄。納屋の様子から多くの「無駄」を発見します。

中桐 生きて働くことができる時間の尊さ、汗水流して手にしたお金の大切さ、鍬や鎌を製造してくれている仲間のかげがえのなさ。そうした一つひとつの小さなことを馬鹿にしていた結果、貧乏にあえいでいたわけですね。金次郎の助言に従い、農家が納屋を掃除すると、収量がV字回復しました。

中桐 尊徳は経営コンサルタントという感じですね。

中桐 「忙」という字は「心を亡くす」と書きます。道具に対する敬意や仕事をやる環境への感謝をなくせば、ただ忙しいだけで収益は得られないのです。

中桐 私も経営指導の中で、仕事で利用する物や道具の大切

に気づいたのは、すごいですが、波沢米も大正期の著作である『論語と算盤』の中で「道徳経済合一」を唱え見えます。

中桐 金次郎の場合、考えたことをきちんと言語化して、人に伝えられた点も大きかったかと思ひます。

中桐 小田原藩や幕府から尊徳が登用された理由の一つでしょうね。後進となる優秀な弟子を何人も育成できたのも、教養をきちんと備え、自分の意図を論理的に説明する力があつたからでしょうね。

中桐 金次郎の没後、弟子たちが報徳思想を広げていく牽引役となっていました。

中桐 静岡県掛川市にある大日本報徳社以前、行ったことがありますが。報徳運動普及の拠点として1903明治36年に建てられたもので、大講堂は国の重要文化財に指定されています。その手前にある正門の右が道徳門、左が経済門と呼ばれていて、道徳と経済が二宮尊徳を語る上で大切なキーワードだと伝わっています。

中桐 これらを全部ひっくるめて、「報徳」というわけですね。受けてきた徳に報いる、恩返しをする。

中桐 おっしゃる通りです。

中桐 能登半島で大きな震災がありました。それ以外にも近年、日本では自然災害が数多く、尊徳の生きた時代と似通ったところがあります。何か助言のようなものがあれば、お願いします。

中桐 そうですね。金次郎は「父母もその父母も我が身なり。我を愛せよ、我を敬せよ」という言葉を残しています。先祖から連綿と受け継がれてきたDNA。多くの壁を越えて、荒地だった原野から様々な命を生み出してきた力。私という命には、たしかにそれが宿っている。その現実を意識し、信じていることがすべての始まりだということですね。

中桐 多くの方がいま大変なことに直面していますが、実は先祖や先人たちが困難を乗り越えて命のバトンを受け渡してきました。困難に負けない力が必ず私たちの中にも宿っているのです。

中桐 心を耕すことでそれに気づき、命の芯に小さな炎が灯されたなら、どんな荒地が前途に広がっていても恐れする必要はない。一人の覚悟から、すべてが再び始まります。

中桐 金次郎はそう言っています。

中桐 勇気をもたえる言葉ですね。被災者の中には経営者、事業主の方も少なくないはずですが、今後に向けた道標になりそうです。

中桐 本日はありがとうございます。

中桐 こちらこそ、ありがとうございます。

なかがりまりこ。1974年東京都生まれ、神奈川県育ち。二宮金次郎(尊徳)の7代目子孫。慶應義塾大学環境情報学部卒業。のち、京都大学大学院教育学研究科で教育学の博士号を取得し修了。専門は臨床教育学。聖和大学専任講師、関西学院大学講師、京都大学大学院教育学研究科特別研究員などを歴任。2007年より、親子をつなぐ学びのスペース「リレイト」を主宰。全国で講演会や企業研修の講師を務める。ほか、公益社団法人日本報徳社理事、国際二宮尊徳思想学会常務理事、学校法人報徳学園理事、株式会社ケー・エフ・シー社外取締役。著書に『二宮金次郎の幸福論』『二宮金次郎に学ぶ生き方』『現代に生きる二宮翁夜話』(以上、致知出版社)などがある。

中桐 正門をよく見ると、二つの門柱の上部を結ぶように鉄製のアーチが架かっています。道徳と経済はパラパラではなく、二つは必ずつながっている、二つを象徴しています。経済があつての道徳だし、道徳があつての経済だし。

中桐 道徳と経済は根と花と同じ関係

中桐 受けてきた徳への恩返し

中桐 中桐